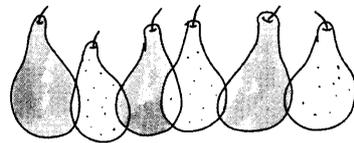
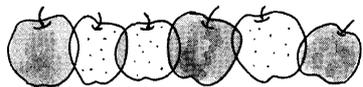


春ごとへ

宮坂静生



啖呵切る飴きりの音呷市へ  
群<sup>むら</sup>肝<sup>ぎも</sup>のいぶりがつこの髓に紅  
山稜の日の薔薇冠や鏡割  
若年や酔のにほひ濃き女の子  
肉<sup>出雲崎 三句</sup>そがれたる鮫鱈よ良寛よ  
良寛の冬の怒濤にいまも坐し



トンネルへ入る華やぎも冬の越  
文旦の腸<sup>た</sup>肉体の悪魔観し  
のけぞれるとよ新しき雪の竹  
蠟梅の放つ匠気を憎めざり  
闇の縁白く残りぬ去年今年  
初夢の兜太それぞれそれだと言ふ  
春ごとへ夕日当りのよかりけり